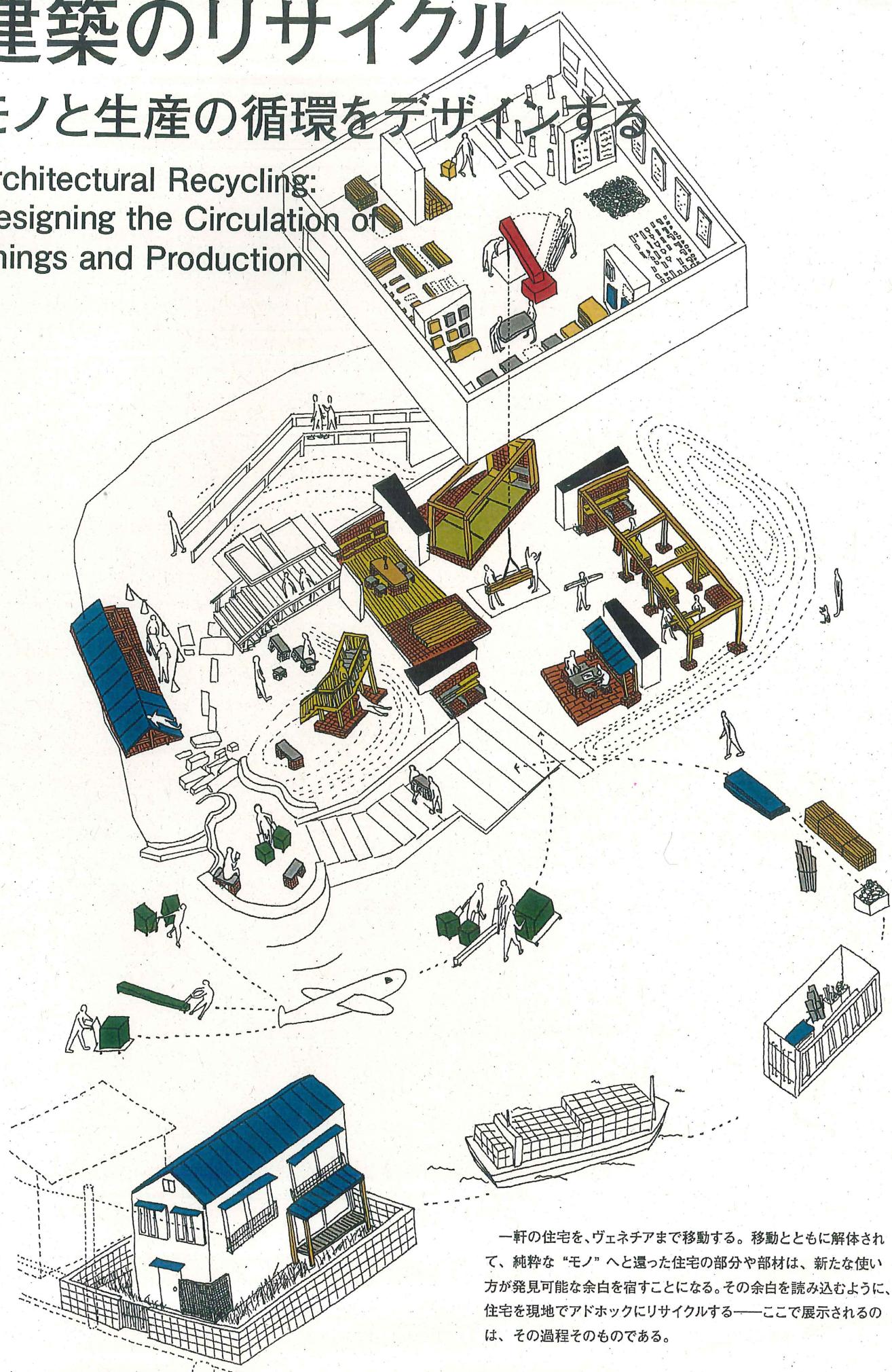


# 建築のリサイクル

モノと生産の循環をデザインする

Architectural Recycling:  
Designing the Circulation of  
Things and Production



一軒の住宅を、ヴェネチアまで移動する。移動とともに解体され  
て、純粹な“モノ”へと還った住宅の部分や部材は、新たな使い  
方が発見可能な余白を宿すことになる。その余白を読み込むように、  
住宅を現地でアドホックにリサイクルする——ここで展示されるの  
は、その過程そのものである。

# 展覧会の基本構想（コンセプト）

われわれが展示するのは、日本のごくあたり前の木造住宅である<sup>\*1</sup>。人口構造が世界に先駆けて大きく変化している日本では、耐用年数が過ぎて解体を待つばかりの住宅が、おびただしい数生まれている。そんな住宅のうちの一棟を、ヴェネチアまで移動して展示する。

輸送コンテナに収めるべく、住宅はいったん解体されるが、現地で展示するのは住宅を構成する材料や部材であり、それらをふたたび組み立てた住宅の象徴的な部分である。また、日本の戦後住宅は、木造の軸組にアルミサッシが取り付け、鋼板が外壁に貼られるといった具合で、来歴の異なる産業のキメラ的複合体の様相を呈しているが、その生産の背景を読み解き、特定の住宅の足もとに描がっている社会的・経済的・産業的な圏域と、その時代的状況を具体的に示す展示とする。これは前回の建築展で日本館が提示した「建築の民族誌」の視点を引き継ぐものであり、とある住宅が根ざす思わぬ拡がりは、ある時代・ある場所の日本の社会を生きしく描写するものになるだろう。

加えて、この住宅は、展示に必要なさまざまな設えのための資材の役割も果たす。自分が展示物になるばかりではなく、ある部分は展示台へ、ある部分はベンチへ、ある部分は作業台へと読み替えられて組み立てなおされるのだ。

とはいって、解体と移動と再組み立ての過程で、この住宅からは多くのものが失われる。それは再利用のめどが立たず破棄された部材だったり、解体前の状態についての情報だったり、住宅の生産上の前提だったりするわけだが、建築家は、日本から職人を引き連れてヴェネチアへと赴き、その欠損を埋めるべく、持参した新しい材料と現地の材料を組み合わせながら、職人とともに住宅の再生と再構築の作業にあたる。その状況はSNSを介してチームで共有され、作業は次なる建築家と職人へと引き継がれる。こうした協働は、あたかもクラウド上のドキュメントの共同編集作業のようだが、そこでは「完成」という概念はどこまでも希薄になる。だからこの作業は、会期を通じて継続していく。

モノの移動にともなって生じた欠損を、アドホックに埋め合わせることで、どうにか成立させるまでの思考と手の軌跡。住宅とともに、ここで展示されるのは、刻々と変化する状況に応じて、構築環境全体のバランスをリアルタイムに回復しつづける行為としての〈建築〉にはかならない。そして、この〈建築〉によって展示物のまわりに立ち上るのは、古い材料と新しい材料が混在し、設計（デザイン）と制作（ファブリケーション）の境界が融解し、幾人の建築家や職人の創造性が重層する、新たに生まれ変わったキメラである。

われわれの日常が、モノや人の膨大な移動、著しく発展した情報技術、世界を覆いつくす市場レジームによって再構成されている現在、建築には、そこで行われる多層的で不安定な営みに、形式を与えることが求められているはずだ。本展で示されるのは、モノとコトが混成して複雑さが極まった構築環境下における、新たな〈建築〉の姿と、その創造にまつわるポジティブなビジョンである。

また本展は、あらゆる情報が掌の上の端末に集まる時代に、世界中からヴェネチアまで建築展を見に行くことの意味を問いかけるものにもなるだろう。<sup>\*1</sup> いくつかの具体的な候補（広島県尾道市のとある住宅など）の中から、実施決定後に絞り込む予定。

## 展覧会の構成

展覧会の会場は、以下の3つのゾーンから構成される。

### ① 展示スペース（屋外）

展覧会のステートメント・出展作家の情報・住宅の来歴とそれが紐づく社会的・経済的・産業的圏域などが、日本館の壁面への投影やパネルによって展示される。また、再組み立てされた住宅の部分が展示され、同じ住宅の部材でつくったベンチや物見台が並ぶ。森の中の展示スペース。

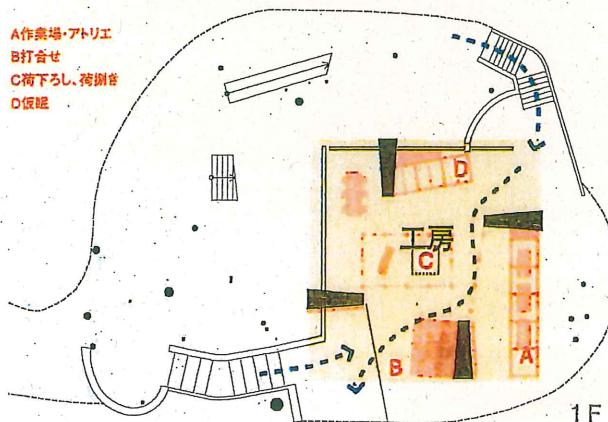
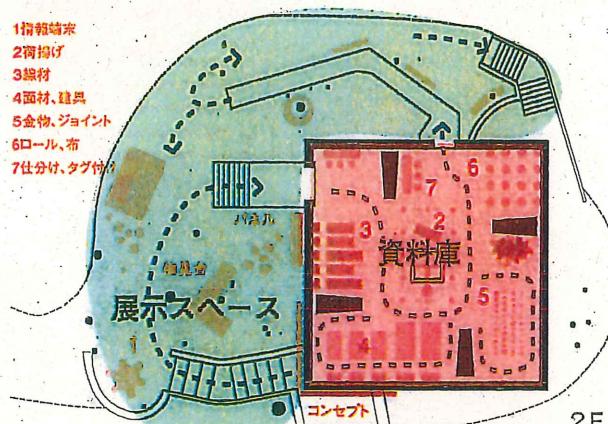
### ② 資材庫（日本館内部）

解体された住宅の部材が、形状や大きさごとに分類・整理されて並べられたスペース。来歴の説明はあるが、部材はあくまで純粋なモノとして扱われる。中央の吹き抜けにはクレーンが象徴的にそびえている。

### ③ 工房（ピロティ下）

吹き抜けからクレーンで下ろした部材の組み立て作業を行う場所。住宅の部分が作業場・打合せスペース・荷捌き・仮眠スペースなどに転用されている。解体・移動・再組み立てのプロセスも映像などで投影される。

来場者は、上記の順に会場を巡る。屋外展示を見て、資材庫を巡り、工房を訪れてはじめて、来場者は、最初に森でくつろいだベンチが、この場所で住宅を組み立てなおしてつくられたものであることに気付く。住宅がリサイクルされるプロセスに、来場者自身も取り込まれてくるような感覚を与える会場デザインを目指す。

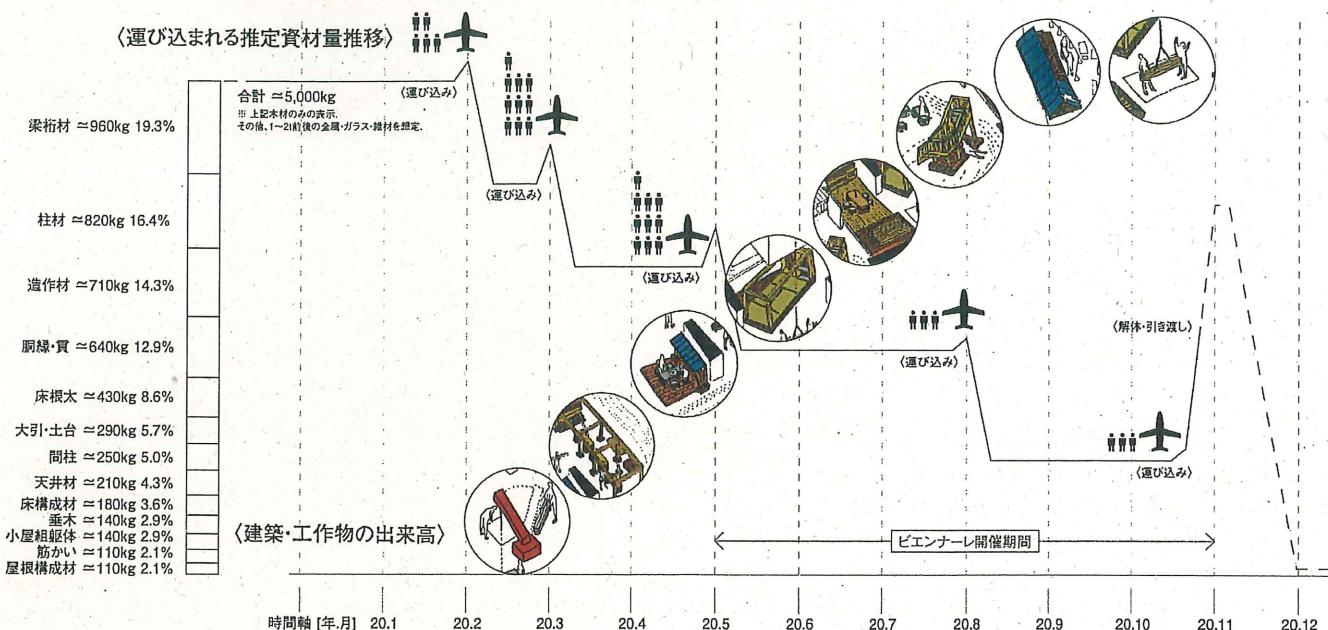


# 展覧会の制作工程

現地に最初に運ばれるのは、展示の対象となる住宅の解体部材である。30坪程度の木造住宅に使われている木材は7t・20立米程度であるが、うち7割の5t・14立米程度の木材と、金属類およびガラスなどの廃材を、コンテナで輸送する。

建築家は、この廃材を主材料として会場を組み立てる。職人も日本で募って引き連れていく、各人が旅客機で運べる範囲の資材（一人あたり30kg程度）を新たに運び込む。この方式によって、現地の不確かな状況に応じた即興的な制作が可能となるが、職人が不足しがちで、工賃も高額なヴェネチアにおいては、コストおよびスケジュール管理の観点からのアドバンテージも有している。

制作は、それぞれを別の建築家が担当し、少なくとも5回に渡って、会期を通じて行う。会期中、「資材庫」から資材は徐々に減っていく、反対に「展示スペース」の制作物は充実していく。更新され続ける展覧会である。



## チームの構成と出品作家の選定理由

展示チームは、プロジェクトを統括するキュレーター、展覧会場を設計・制作する出展建築家、展示や印刷物全般のグラフィックを担当する出展デザイナー、展示物の来歴調査や日本およびヴェネチアの産業構造の調査を行うリサーチャー、展示および印刷物に関わる編集を担当するエディター、展覧会の運営に関して全般的な助言を行うアドバイザーから構成されている。

出展建築家は、会場全体の設計・制作を、キュレーターとともに全員が協働して行うが、出展建築家はいずれも、従来の建築の枠組みにとらわれない分野越境的な設計活動を行っており、また建築の具体でオブジェクティブな側面に着目したデザインを展開している点に特色がある。2000年代の日本の建築は、白くて抽象的な表現をひとつの特徴としていたが、2011年の震災を契機に、現代の建築表現は、抽象からむしろ具象へと向かいつつある。海外ではいまだかつてのイメージが根強いが、本展を通じて、従来の現代日本建築のイメージを刷新する建築および建築家像を打ち出し、今日的な日本の建築シーンを世界に発信する。

	キュレーター 門脇耕三 (建築家・建築学者) 明治大学・アソシエイト		出展建築家 長坂常 (建築家) スキーマ建築計画		出展建築家 岩瀬諒子 (建築家) 岩瀬諒子設計事務所		出展建築家 木内俊克 (建築家) 木内建築計画事務所・東京大学
	出展建築家 砂山太一 (建築・芸術学者) 京都市立芸術大学		出展建築家 元木大輔 (建築家) DDAA		出展デザイナー 長嶋りかこ (デザイナー) village		リサーチャー 青柳憲昌 (建築史家) 立命館大学
	リサーチャー 樋渡彩 (建築史家) 近畿大学		エディター 飯尾次郎 (編集者) スペルブルーツ		アドバイザー 太田佳代子 (建築キュレーター) CCA・ハーバード大学		協力 LIXIL・窓研究所 (今後も隨時協力依頼予定)